

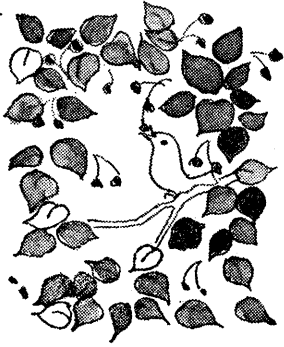
『子どもへの愛』の社会学(3)

——近代社会と子ども——

山田昌弘

前回、近代化と共に「子供への愛」の強制が規範化され、その強制が、子ども、親、教師にとって情緒的に負担となっている(少なくとも前近代社会に比べて)事を述べた。子育て、教育の場において、「自然」に愛情を感じられる場合はよい。しかし、愛情の歯車が狂うとき(狂うのが普通なのだが)、愛情の強制の規則は、重荷となって人々を苦しめる。

今回は、子供への愛情の強制が生じなければならない



理由を、近代化論との関連で考察していく。

7 近代化と子育て

「近代化と子育て」という組合せから、何がイメージされるだろうか。子どもが大事に育てられ死亡率が下がれる、公教育が普及する、子どもの人格への配慮、等々。これらの特徴は、表面的なものだ。近代化と子育ては、もっと深いところでつながっている。

西ヨーロッパをモデルにとると、二つの大きな変化を経て、近代社会が形成されてくる。一つは、ルネサンスから新大陸発見の頃、世界市場の成立という変化が生じた。前近代社会では、普通、自分達のためだけに生産し、余剰を市場に回していた。しかし、大規模な市場が成立すると、初めから市場に商品として売るためにもものを作ることが普及してくる。この時期は、前回述べた、家族の中に子どもへのかわいがりの感覚が生じ、モラリストの間で子どもへの厳格な躰が言われ出した時期と一致する。もう一つは、産業革命期に生じた変化である。

商品生産が工場で行われるようになり、人々は工場で働 きその見返りとして賃金を得る。いわゆる、労働力の商品化が普及していく時期である。

以上の変化は、単に技術や経済的な側面に限られたものではない。人々の心理的な側面に大きな変化が生じている。それは、人々が何かする時に働く動機づけの問題である。前近代社会では、原則として動機づけの問題を考える必要がない。というのは、社会の変化がない、もしくは非常にゆっくりしているため、人々は昨日や去年と同じように行動していればよい。自分たちのためだけに必要な事が必要だけ行うため、自分の行動の意味を考える必要がない。

一方、近代社会は動機づけが問題にされる社会と言ってもよい。何かを行う場合、その動機、理由が問題にされる。自分の行動や、他人の行動を、表面的な結果だけでなく、内面的な動機を読み取って理解しようとする（ダニエル・ベル『資本主義における文化的矛盾』参照）。子育てという活動も、例外ではない。近代以前の社会

では、親たちが子どもを育てる、親類や近所の人が子どもを面倒をみるという事は、あたりまえの事で、とりたてて理由を考える必要のないことだった。母乳を与えるのが、母であっても親戚のおばさんであっても、乳母であっても、その意味の違いをとりたてて考える事はなかった。しかし、近代社会では、子どもを育てることに、納得できる理由が必要になる。表面的には同じ行動でも、読み取られる動機により、質的に非常に異なったものとして解釈される。例えば、母親が子の面倒をみる、雇われたベビーシッターがみる、親戚がみる、これらの例は、表面的な行動をみればほとんど同じことをしている、人々が受け取る意味には大きな差がある。親が育てていけば、愛情から育てていると意味付与されるだろうし、ベビーシッターはお金を貰えるから世話していると思なされる。

8 シャドウ・ワークとしての子育て

近代社会は、市場社会として特徴づけられる事を述べ

た。市場は交換の世界である。商品を作り、売り、必要な物を買う。労働力を売り、賃金を得る。そこでは、人は打算的な動機に基づいて行動する。人は、自分の商品や労働力、サービスをより高く売ろうとし、相手の商品やサービスをより安く買おうとする。

このような市場世界の中では、子育てという活動の位置づけに困ってしまう。子を育てる事は、母乳を与える、世話をする、教育費を出す、小遣いを与える事などを含めて、子どもに対する一方的な贈与である。いくら子どもにサービスや資金を投入しても、支払い能力のない子どもから、見返りを期待することはできない。

『脱学校の社会』で有名なI・イリイチは、近代社会において対価が支払われない労働を、「シャドウ・ワーク」と名付けた。親が行う子育て活動は、「通勤や受験勉強と同じくシャドウ・ワークの典型である。例えば、ベビーシッターが子どもの世話をする、賃金が支払われるが、親が同じことをしてもお金は支払われない。

では、打算的動機づけによって特徴づけられる近代社

会において、シャドウ・ワークは、どうして行われるのだろうか。通勤や受験勉強のようなシャドウ・ワークは、賃金を得るために仕方ないとか、将来への投資といったように打算的な動機によって解釈することができる。イリイチのいう、近代社会で生活するための強制労働ということができる。

しかし、子育て活動は、通勤や受験勉強のようなシャドウ・ワークとは、少々色合いが違う。というのは、親にとって、子を育てる事は、生活する為に必要な労働ではないからだ。もし、子育てを打算的動機によって解釈するなら、子育てが損だと思ったら、子育てをやめる選択も出来るはずだ。イリイチは、この点に関してはっきり述べていない。

ここに、「子どもへの愛」という動機づけが登場してくる理由がある。自分の子どもを育てるといふ活動は、親の意識の中で、市場における活動とは異なった意味をもつものとして受け取られる。家族を離れての物やサービスのやり取りは、打算的な観点から行われる。家族内

の子育ては、情緒的な観点から行われる。つまり、子育てが情緒的に行われるべきだ（子どもに愛を感じるべきだ）というイデオロギーが、親の子に対する無償労働を支えている。近代社会は、子どもへの愛の強制なくしては、人の再生産という社会の存続に不可欠な活動を確保できない。

9 現代社会と子どもへの愛の変貌

先進資本主義国では、一九六〇年代末から、家族の領域に大きな変化が生じつつある。女性の職場進出、離婚の増大、同棲、未婚の母の増加など、統計的に目に見えるものだけでも大きく変わっている。アメリカでは、特に、離婚や再婚が多く、スウェーデンでは同棲や未婚の母が多い。

子どもを巡る環境も、変化を被らざるをえない。先に述べてきた通り、近代社会では、父母が自分の子どもを排他的に育てることが、規範化されている。そして、父親が市場で働き賃金を得、母親が子どもに対してサービ

スを供給するという性別分業が一般的であった。そして、その活動は、「親は子どもに愛を感じるべき」というイデオロギーに支えられている。現代社会で生じつつある家族の変化は、この前提を覆す可能性を持っている。

アメリカでは、離婚や再婚を繰り返すというパターンが増大している。一九八〇年には、二四一万組の結婚が行われた反面、一一八万組の離婚が生じている。離婚、再婚の結果として、多くの片親家庭やステップ・ファミリーと呼ばれる継子や継親と一緒に暮らす家庭が増大した。すると、子どもをめぐる情緒関係が複雑化する。別居しているが面会権を持つ親、同居している継親、継兄弟など、近代社会の情緒パターンでは処理できない新たな子どもとの関係が出現する。スウェーデンで増大している未婚の母も、父親の情緒的関与の欠如、そして、公機関や母方親族のネットワークの関与など、子どもにとっての新たな情緒関係のパターンを生じさせている。このような傾向は、子どもをめぐる情緒関与のパター

ンを多様化させる。近代的パターンからはずれた状況を、病理とか家族の崩壊と捉える識者もいる。子どもに情緒的に関わる人々が増大し、子育てが多様ネットワークに支えられる方向に変化するなら、むしろ好ましい傾向ではないだろうか。「子どもを愛さなければならぬ」というイデオロギーにとらわれる事なく、自然に感情をやり取りできる環境の出現を望みたい。

(二完)

(東京学芸大学)